

- 1・はじめに
- 2・成人教育視覚資料委員会
- 3・占領下の活動
- 4・のぼら児童文化会
- 5・手描き紙芝居のリスト
- 6・追悼吉村一信
- 7・おわりに

1・はじめに

箕面市立中央図書館所蔵の紙芝居・吉村一信コレクションについて京都文化短大紀要前号、第二十九号にて詳報した。その際にこれが戦後すぐ東京以外で出版された印刷紙芝居の、今のところ最大規模のものであることを述べておいた。今回は教画出版紙芝居以外の、特に手描きのものについてを中心にして、吉村氏の紙芝居活動をからめて述べてみたい。

2・成人教育視覚資料委員会

吉村一信コレクションの中で一番発行年の古い「御利益石」は昭和二十四(一九四九)年六月十五日の発行であることは、奥付けに明記されていたのは間違い無いが、二セットの「御利益石」のうち一セットに「作・吉村一信」の書き込みがあるものの、本来作者表示は画家表示とともに無かったことは前回報告した通りである。(注1)

このことで、それ以後この紙芝居の企画制作団体である成人教育視覚資料委員会の紙芝居目録を見つけることができ、間違いなくこの「御利益石」が吉村一信氏の作であることをその目録で確認できた。目録はB4判両面に印刷の上四つ折り(B6判)したもの、以下全文を収録した。

成人教育紙芝居目録

成人教育視覚資料委員会

大阪市東區北濱四丁目

(安田ビル二階 205 号室)

趣意書

民主主義教育の徹底は誠に難きものがあり、いろいろ御苦心を拂われていることと存じますが、これを興味深い紙芝居に織込んで視覚と聴覚に訴える事は極めて効果あることと存じます。本会はこの趣旨に基き近畿民事部民間教育課指導の下に、教育・情報・法律政治・経済・厚生・衛生の各科目につき二十篇の紙芝居を制作中であります。幻燈の制作にも着手して居ります。既に紙芝居の制作済のものは近畿各府口の成人教育講座に採用されていますが、その面白くて解り易いことに於ては小学校上級から高等学校三年迄の社会課の学習資料にも好適のものと存じここに各位の御批判を願う次第であります。

情報

火星地球を攻撃す

原作 十河和康

[梗概]ゴミダメ新聞が、一つの人気取りに発表したデマ「火星、地球を攻撃す」のニュースは町を混乱と恐怖におとしこんだ。

そして、デマを信じる人間の哀れな喜劇がくりひろげられていった。

が、この新聞社の社員の中にも、真実の報道を心から願うものがあって、このデマをくつがえそうと、

小さき力ながらも立上がるのである。
(全二十巻 定価二七五、〇〇 荷造送料共)

経済 食料問題
よろこびの日(印刷中)

原作 吉村一信

[梗概]現在の食料恐怖を無くするには.....？

手に負えない、一悪徳農民を主材に、物語は供出反対一闇一横流し一検挙と、事件は次々と駆けめぐる。

而し、一度罪に問われた者も改悛して、民主の道を歩むと云う、興味溢れる、紙芝居である。

法律経済
吾等のつとめ

原作 吉村一信

[梗概]戦争で痛めつけられた、吾が国土を救うものは.....。

この物語は現在日本で真面目に考えねばならぬ問題で、吾々に与えられた課題です。

而も全篇を通じ、希望と光明が、このすさんだ吾々の胸に波打って平和、文化、日本建設に努力すると云う、民主日本の復興篇。

社会衛生
御利益石

原作 吉村一信

[梗概]不思議な村を訪れた保険医山野夫婦は、無知な村人達の嘲笑と反対を押し切って、苦悶を続ける。

而し、夫婦達によって、何百年か伝わる神秘の扉が開かれた。

問題の御利益石をめぐる迷信の数々.....。

果して御利益石の正体は？

山深いある村の迷信打破の物語である。

(全二十巻 定価二七五、〇〇 送料共)

家族制度を廃止させた新民法
愛情の紐

原作 別所夏子

[梗概]黒船渡来当時そのままの封建的な漁村のある家庭に、母と娘の協力で点されたデモクラシーの灯。

「子は親のもの」

と、政略結婚を強いた父も、娘の愛情の花をつみ取ることは出来なかった.....。

家庭裁判所
馬と妻

原作 別所夏子

[梗概]競馬に魂奪われて、

「女房なんて金を喰う厄介な動物さ」

と、妻子を忘れた夫は、遂に妻から離婚された。

家庭裁判所の実状と人間に生れ代った妻の姿を描いたもの。

厚生 公共福祉

明るい人生

原作 阿部克孝

[梗概]生活の不安におののく未亡人親子、このような不幸な人が今の日本にどれ程多いことだろう。しかし民主日本に、これを救う生活保護法があり、社会保険がある。未亡人すがさんは、此等の保護を受け、二人の愛児を抱えながら、明るい人生を迎えることができた。また立花氏は保険のおかげで、人生に生きるの楽しさを覚えたのである。複雑な社会保障制度を手ぎわよく説きあかした物語りである。

法律政治 裁判制度と刑事訴訟

問題の示談書

原作 阿部克孝

[梗概]古い刑事訴訟が如何に改正されたか、心ならずも街の親分の威光に恐れて、示談書に捺印したばつかりに、不法な傷を受けた一老人の訴訟は、うやむやに葬られそうになった。だが、新刑事訴訟法では、問題の示談書か、一老人の人権か、その何れを正と審査するであろうか。息づまるような場面が展開する。

法律政治 新憲法

目ざめ初めた村

原作 阿部克孝

[梗概]年中水びたしの不幸な村を尻目にして、大邸宅を構えた村長に対して、一青年は立上った。村民大会の席上、はげしい論戦は火花を散らした。多くの子分を持つ巨体の村長に、新憲法の基本的人権に依って新しい息吹を与えようとしている。しかも、村長の娘を始め村人達はこの一青年の叫びに立ち上る。村長もかくて反省を促され、やがて目ざめ初めた村となるのであった。
(全二十六巻 定価三四三、〇〇 荷造送料共)

この場合「原作」とあるのは「脚本」の意味であると思われ、「絵」を描いたものではないとの意味もあると考えられる。ともかくここに「御利益石」の作者として「原作 吉村一信」と明記されていたのだ。そして趣意書にある「近畿民事部民間教育課」というものは、一九四五(昭和二十)年から一九四九(昭和二十四)年の間日本を占領していた連合軍総司令部(GHQ)の地方機関のはずであり、このパンフレットに発行年代の記載はないのであるが、一九四九年までと推察できる。

3・占領下の活動

「御利益石」は、パンフレットにもあるように、石にさわって病気を治す迷信を持つ村人が、山野医師の説得で蒙が啓かれるという紙芝居であった。その第十七の脚本は

(十七)

(説明)始めて自分達の馬鹿であったことに気の付いた村長や村人達は唯黙って、ひれ伏しているのであった。やがて村長はきまり悪げに

村長「先生よく解りました。私達は今まで迷信に迷わされ、全く無学だったのです。今やと後悔されました。その上、立派な先生を、あの様な乞食小屋同様の家に住ませ、さんざん苦しめた私達のいけなかったも、どうかお許し下さい。この上は一日も早く立派な設備の整った保健所の建設に努力し病人村の汚名をバンカイする覚悟です。どうです、皆の衆？」(原文ノママ:引用者)

村人「その通りその通り」

山野「解って頂けましたか、こんなうれしいことはありません。皆さん今後、日本が文化国家として、

世界の人々と手を取り合っていくにはどうしても健康でなくてははいけません。どうか昔の古いカラから抜け出て頂きこのゴミ臭い田野村を住みよい立派な村にしようではありませんか。」
そこで早速村人達によって御利益石についていたきたない何百年間の垢や眼やにがきれいに洗い落とされました。(ぬきながら)
それから幾日後(抜く)

ところで吉村一信コレクションの中でGHQの検印の押されたものがある。「CENSOR PASS」(検閲済み)の略のPCのスタンプである(写真1)。「敬太の希望 103」という手描きの紙芝居を見てみると、これは「原作並びに画 吉村一信」とあり二十一枚の作品であるが、一枚一枚にこのPCスタンプが押してあった。そして検閲者のサインらしいものも書き込まれているし、その日付が一九四八年七月二十八日であることも明記されていたのだ。そして気になるのは表題紙に書かれた「103」という数字である(写真2)。普通に考えると、これは「第103号」ということなのである。つまりその前に百二巻の「敬太の希望」が存在したということなのであろう。街頭紙芝居は毎日同じ場所に行って子どもに続き物の紙芝居を見せるために百巻を超える同一タイトルの作品は当たり前なのだが、そこから類推すると吉村一信氏も、街頭紙芝居のスタイルで紙芝居を描き街をまわっていたのではないかと思われるのだ。しかしそれにしてもその前の百二巻はどこへ行ったのだという疑問がわいては来る。これも想像だが、紙も貴重な時代であり、ともかく今からでは想像できないほど物が無く、高価で貴重な時代だったので、いろいろに使いまわして、ついにこの巻しか残らなかったのではないかとも思うのである。極端な話、ボール紙の台紙に次から次へ新しい絵を、前の紙をはがして張っていったというようなことも考えられる。この「敬太の希望」は戦争で孤児になった敬太が、靴磨きで暮らしながらいろいろな苦勞に耐え、ついに死んだと思っていた親にめぐりあう、というこの第103巻が完結編のようであるから、そのようなことを空想するのであった。そしてもし、街頭紙芝居の様に吉村一信氏が街をめぐり、物語の中にある境遇のような子ども達にそれを見せていたのだとすれば、啓蒙的なその主張よりもむしろその実践に頭が下がると言わざるを得ない。GHQのスタンプはもう一点、「シグナルサン 26」(写真3)と言う手描き紙芝居に押されていた。作者名などはなくスタンプの日付は一九四七年十一月二十六日、全十六枚のはずだが第十二が欠落している。これも26と言う数字が巻数であると考えられる。こちらはあまりまとまった筋書きではない。しかしこれも街頭で上演されていたのではなかろうか。GHQのスタンプのあるものは他には「鶴ノオンガヘシ」と言う印刷紙芝居にしか見られない。しかし、どのように使用されていたのかは不明なのだが三十九×五十五センチの大型の紙芝居「元気になった繁君」と言う作品があるのだ(写真4)。制作の日付は書かれていないが、その内容によって時代性が刻印されていたのだ。主人公の繁君が元気が無い。そして先生に繁君が、なぜ日本が戦争に負けたのか、これからどうしたらいいのかと質問する。

(七)

先生「ねえ、繁君、体操や図画ばかり上手で、ほかの科目があまり出来ない生徒があるだろう。残念だけど日本はね。ちょうどそういう生徒のような国だったのさ。兵隊さんだけはとても強かったけれど、第一国と国とのおつき合いも上手な方じゃなかったし、それから、まだまだ、いろいろなことがまずかったのだね。
それがはっきりわかったから先生はもう悲観はしないよ。こんどの戦争で、若しも日本が勝ったとしても、そういう事に気がつかず長つづきはしなかったと思うね。でも繁君、自信をなくしちゃいけないよ。日本はよくなろうと思ったら、何処までも何遍までもよくなれる国なんだ。」(ぬく)

(八)

先生「ねえ繁君。こんどこそ、何処の国よりもこうになろう。何処の国よりも平和になろう。世界じゅうの人間が、もっともつりこうになればばかばかしくって戦争なんかなくなるんだ。日本は世界一

の大戦争をやったけど、戦争はもうこれでおしまいだ。

こんどはあべこべに世界中から戦争をなくすお手本の国が日本だ。がんばろう。ほら。紅葉のきれいなこと！空気の気持ちのよいこと！こんないい景色を誰も見に来ないね。どら、一つ駆け足でいきましょうか、繁君。向うの丘まで馳っこしよう」

繁「ええ、しましょう、先生」

先生「よし。一、二の、三ッ！それっ！」(ぬく)

このような啓蒙的な思想と、紙芝居の持つ行動性で、吉村一信氏は占領下をのりきったのであった。吉村一信作と明記のある同じ大型紙芝居「勝利の野球」はアメリカンコミック風の絵柄で、裏の脚本がなく絵だけなのだがやはりこの頃の作品ではないだろうか。

4・のぼら児童文化会

そしてその紙芝居活動は吉村氏の単独行動ではなく「のぼら児童文化グループ」あるいは「のぼら児童文化会」というグループで行われていた。手描きで裏の脚本が無い十一枚の作品「怪物退治」は作・画とも吉村一信で「のぼら児童文化会」の記述と「1946・2」の日付が有った。大型の紙芝居「くまの目ざまし時計」にも、他には何のデータも無いが「のぼら児童文化会」の記述が見られる(写真5)。

さらに「児童文化研究誌」と銘打たれた「のぼら」が二冊、これも吉村氏周辺の資料に残っていた。

(1) 昭和二十五(一九五〇)年二月十五日発行、第二巻二号、B5判、十六ページ

(2) 二九(一九五四)・二・一五(巻頭言の日付)、発行日付巻号記述無し、B5判、二十六ページ

この二冊である。(2)の巻頭言によると

ともかくあの大和川の武田塾の生垣に咲きこぼれたのぼらを見て、誰から云うともなくグループの名が「のぼら」ときめられ、そして研究の歩が進められてきた。それから六年の月日が流れようとしている。

とあり、これはグループの主宰者阿部克孝の署名がある。であるならば、一九四八(昭和二十三)年に「のぼら」は発足しているはずなのだが、「怪物退治」はそれよりもさらに二年早い日付がつけられているわけだ。この雑誌「のぼら」自体は(1)に記述されているところを見ると「編集者 吉村一信、発行者 阿部克孝、印刷者 槌野幹衛」とあり「毎月一回発行」とある。第二巻二号と書かれているので第一巻一号は一九四九(昭和二十四)年一月に出されたのだと推定できる。成人教育視覚資料委員会との関係は不明であるが、占領期が一九四九年までであるから、それ以後「のぼら」の活動と見、さらに一九五四年以降を教画出版紙芝居の活動とすると区分けが簡単になるのだが、そう単純にもいかず、お互いは重なり合っているのが現実なのだろう。(2)の編集後記には構成員の名前と勤務先の表があり、この「のぼら」グループのメンバーのほとんどが教職か社会教育関係の職にあったことが解るのだ。この表を以下に収録しておく。(注2)

吉村一信・東住吉区平野校

槌野幹衛・西成区橘校

山田茂穂・阿倍野区丸山校

安田耕三・西成区弘治校

佐藤成信・東成区東成市民館

山本希夫・北区梅田厚生館

竹内淑子・八尾市山本校

馬淵迪子・大淀区豊崎東校

玉木久子・生野区東小路校

村井壽雄・生野区中川幼稚園
古屋千春・布施市三瀬天理教
阿部克孝・生野区東小路校

そしてこのグループがどのような活動をしていたのかうかがわせる文章が(2)にあった。竹内淑子によるものだが無題である。少し長いが全文を引用する。

今日は少し風がきつかった。でも子供と約束した日、用和校のI先生と二人子供のまつ佐堂へと、あやしげな私の自転車より、でも紙芝居を後に積んで田んぼ道を走る姿は自分自身一人優越感をもって、自動車が前から来ると、一々下りて歩いた私だったけれども次の会場にも百名近くの子供が待っていてくれるのかと思えばペダルをふむ足どりも軽く佐堂の境内に入った。そのとたん半ば予期していたものに直面しはっとした。それは商売の街頭紙芝居夫婦と正面に、子供達はこれから始まろうとするそれに集まっていた。その横を私達は自転車で境内に入った。「やあ先生の紙芝居や」と四十名近くの子供は先に集まっていた場所よりぞろぞろと私達の周りに集った。I先生は「誰か皆のうちに拍子木がないか」と聞かれた。「はい、ぼくのうちにあります」と答えてすぐ持って来てくれた。「ぼくいつてくれる？これをたたいてみんなをあつめてくるの」「うん」とにっこり笑う。すぐさまかちかち／＼「先生の紙芝居や」といって廻ってくれた。「どこでやってるの」「おみやの境内や」こんな声がかきこえてくる。三つ四つの子供から、中学生、おかみさん、おばあさんまで何時の間にか八十名をこしてしまっただ。先生早くして」と子供の声。自転車の上に舞台を立て、やろうとした時、例の先の紙芝居の夫婦、女の人がかち／＼とやって来た。その顔はなんと私にはおそろしく見えた。「いつおわりまんね」「そうですね。もう三十分もすれば」「え、三十分も。わてらここすみましたら次の会場に行きまんね」「あんたら券持ってんのんやろ」と今度は子供にあたる。ここで「じゃさきにさあ向うを見てこちらにおいで」と子供をやらせばよかったかも知れない。或は「一緒にやりましょうか」といったなら、どの位あの女の人の顔や心をほぐしたであろう。それにしろとうとの私達。向うがそうであれば余計に逆してみたい本能的なものにかられた。云わなくてもいいことまで、いってしまったような気がする。一卷おわってしまうまで女の方はじっと見ていた。そしてすつとどこかへ行ってしまった。そのまま三巻位でやめておけばよかったのに四十分あまりやったと思う。子供達が真剣に紙芝居にとけこんで、こちらもいつの間にか一緒になって熱が加わっていった。子供のまなこが画面に吸いつけられていた時は、一番嬉しかった。やっとおわった。「先生今度はどこへ行くの」「萱振の御坊さんへ」「又やってね」と口々にいう。其処を引上げる時、何所からもどって来たのか先の夫婦がやって来た。「おそかったな」と一言。ふとすれちがった夫の姿を見て私はびっくりした。足が悪かったのだ。その時急に悪かったような気がして心の中であやまらざるを得なかった。後になって他の同僚にはなしてみた時、「向うはそれで生活しているんだから先にやらせてやればよかったんだ」といわれ「そうだ相手は生きてゆくためにしんけんなんだ、ゆずればよかった」という気持ちと、でもまだ心のおくには「悪質な紙芝居排けきの上には私達の方が良かったのではなかったかしらというぬぼれと両者の気持ちが何時までも、もつれ合って私は分からなくなってしまう。街頭紙芝居をやる人の声音と、あくどい紙芝居の画面が何時も私の頭からはなれなかったからだろうか。(注3)

このように、街頭紙芝居業者と競合しながら街頭での紙芝居上演活動をしていた教師がいたのである。

5・手描き紙芝居のリスト

以上取り上げてきた手描きの紙芝居のほか、吉村コレクションには、学校の教え子たちが描いたと

思われる作品もある。「いなむらの火」のように既成の紙芝居作品を、どのような過程を経たのかは不明であるが、クレヨンで描き直しているもの、「平野小学校」と書かれている「山の音楽師」(写真6)、45・5・22の「検吉村」の日付印のある「アドバルーン」これは「さかい、かじたに、たにむら、おかもと」と作者の名も記されていた。

どうも手抜かりがあったようで、「くまの目ざまし時計」のデータが無い。となると吉村コレクションは全点五十三点になる(注4)。そのうち二十点が手描き紙芝居と数えられる。それを五十音順に列記してみよう。

1. アドバルーン、さかい・かじたに・たにむら・おかもと作、42・5・22検吉村の印、十七枚、クレヨン手描き裏書きあり
2. あまてきじいさん、十八枚、水彩手描き裏書き無し
3. いなむらの火、十三枚、クレヨン手描き裏書きあり
4. いなむらの火、十五枚、クレヨン手描き裏書き無し
5. 怪物退治、作画吉村かずのぶ、のぼら児童文化会、1946・2、十一枚、手描き裏書き無し
6. くまの目ざまし時計、のぼら児童文化会
7. 敬太の希望103、作吉村一信(原作並画)、1948・7・28GHQ検印による、二十一枚、手描き
8. 元気になった繁君、39×55cm、十六枚、水彩手描き裏書きあり
9. コザルノ恩ガヘシ、日本教育紙芝居協会、二十二枚、水彩手描き裏書き無し、しかけ多数
10. シグナルサン26、一～十六欠十二、1947・11・26GHQ検印による、十五枚、水彩手描き裏書きあり
11. 十一ぴきのねことあほうどり、39×55cm、二十枚、水彩手描きリング綴じ裏表とも絵(絵本様)
12. 勝利の野球、吉村一信作、39×55cm、十五枚、水彩手描き裏書き無し
13. しろとくろ、39×55cm、十二枚、水彩手描き裏書きあり
14. すずめのようにえん、39×55cm、十二枚、水彩手描き裏書き無し
15. つきよのがん(吉村一信アイデアスケッチ)、十二枚(「がんのたび」の最初のアイデアと思われる)
16. つきよのがん(下絵岸谷勢蔵、校正吉村一信)、十六枚(「がんのたび」の下絵と思われる)
17. とりめをなおしたすみちゃん、文画津田富夫、十四枚、水彩手描き裏書きあり
18. 港についた黒んぼ、55×76cm、十七枚、水彩手描き裏書き無し
19. 山田長政、18・1・10の印、十八枚、色鉛筆手描き裏書きあり
20. 山の音楽師、平野小学校、十七枚、クレヨン手描き裏書き無し

このうち3、4、11、18は既成の紙芝居や絵本が存在し(注5)、それと何らかの関係がある(例えばお手本にしたとか、大型化したとか)と思われる。13と15、16は教画出版の印刷紙芝居がある(注6)。そしてこの手描き紙芝居の活動の上に教画出版の教育紙芝居出版活動が開花したのだと推察できる。教画出版紙芝居にひんばんに出てくる「童話教育研究会」と言う団体は、もちろんこの「のぼら児童文化会」の発展した形態であろうし、私などはその名称で大坂童話教育研究会を連想したのだが、吉村一信と言う人の存在によってそれをつなぐ確かな線が有るのが明らかになったのである。

前稿以後に再び私は教画出版紙芝居を四点入手できた。これが幸いにもまた箕面市立中央図書館のコレクションとは一点も重なっていなかった。

いろはかるた 編・童話教育研究会(生活単元教画シリーズ第一集[十])'55

お山の消防隊 編・童話教育研究会(生活単元教画シリーズ第一集[九])'54

冬ごもり 編・演出教画研究会(自然観察教画シリーズ第一集[十])'54

おそらく一九五四(昭和二十九)年から一九五六(昭和三十一年)年の三年間に、大変な数の紙芝居が出版されたわけだが、この出版に関してまだ少しも資料が出てこない。教画出版株式会社の代表者西村重太郎氏、同じく印刷を担当した集画堂印刷株式会社も西村氏、そして教画出版編集部の角田逸二氏などがどのような働きをしたのかも解らない。知見の狭い私だけが無知なので、まだたくさんの当時を知る方がおられるのだから、どうかご教示願える方がいて、証言をしてほしいと祈っている。

さらに、全国に紙芝居を資料として備える図書館は増加しているので、それらの目録から教画出版の紙芝居をひろいだし、教画出版の、今の時点で知ることのできる限りの、全貌を明らかにしなければならぬと感じている。

6・追悼吉村一信

さて吉村一信氏が急逝し、その追悼文が編集され小冊子として小田又二郎、本多義一氏らによって発行されたのだが(注7)そこに、のぼら児童文化研究会のメンバーが私の解る限りで四人文章を寄せていた。それを全文引用する。

吉村先生との出会いと学生時代 槌野幹衛

太平洋戦争が勃発して間もない昭和十七年春、私は大阪第一師範学校に入学しました。その頃の一年生は全員が入寮し、軍隊に準ずるといわれる厳しい寮生活にはいりました。その生活の中で週に一度、木曜日の夜に、今でいうクラブの時間があり、心の休まる時間でした。私はお話の会にはいりそこで初めて吉村氏と出会い共に語り意見を交わすようになりました。師範学校でも選択科目として研究部にはいり童話、紙芝居の演出や創作に熱中しました。二年に進級して通学するようになってからは互いに家庭を訪問して一夜を語りあかすこともたびたびありました。昭和十八年、学童疎開が始まり、子ども達を慰問しようと二人で紙芝居と舞台を持ちよく出かけました。

富田林市の南端にある甘南備、汐の宮に、奈良県吉野郡野迫川村の小学校、北垣内中学校で、童話と紙芝居を二人で夜おそくまで交代しながら会をすすめたこと。また登り道になると下車して押した木炭バスのこと、積荷の木材の上に乗せてもらったトラックのこと、今でも目の前に浮かんできます。これ等のことは総て吉村氏の計画で実行されたことで、その当時から吉村氏は実践の人で周囲の人をぐいぐいと引っ張り、率先して実行される立派な人でした。(十二頁)

山田茂穂

「今日の出し物は……」。とプログラムを組む。昭和二十二年頃、毎月一回の長谷川学園の上演である。都合がつかず吉村先生と二人になってしまった。が、私の紙芝居一本以外、童話、腹話術、奇術、人形劇と見事にまとめて下さった。午後たんぼ道を武田塾へと向かう。この道々でのご指導やお話の数々が、今も私の糧となっている。

武田塾につくと、ここは先生の生家かと思う程、塾長先生はじめ職員の方々と交わっておられた。身軽に動かれ、細く気をつかわれる。ここに多くの人から慕われる先生の本領があったのだと、今更のごとく思い出される。

児童文化に対する研究も深い。阿部克孝先生を主宰とするのぼら児童文化グループの中心となり、紙芝居の創作製作実演に努力された。今宮市民館で夜のふけるのも忘れて、うどん鍋をつつき乍ら論じあった頃の懐かしさも忘れられないものの一つである。

ご退職後も、かつての後輩の研究発表会に花を添えられた帰路粉浜駅ホームで、のぼら会の活動計画を話し合ったばかりだったのにと、今も信じられない悲報である。先生の遺業みおつくし会の隆盛に力を尽くすことを誓ってご冥福をお祈りする次第である。(十七頁)

竹内叔子(注8)

吉村先生、ほいえみながら、頑張っている私達を見守っていて下さることでしょ。

子ども達が、先生のすばらしい人形劇をいつも待っていたのに……、ずい分早く他界なさって、残念でたまりません。

先生には、のばら会で色々お世話になりましたね。みんなに語りかけるように話される話術、こちらまでもくいいるように、聞きほれたものでした。

それにもう一つ人形劇、いつも新しいのを作って下さって、うまく人形をあやつり、子ども達を物語りの中にひきずりこんでいく！。又紙芝居も同じ。みんなみんな子ども達と私達までが、ぐいぐい入っていくような感じでした。実演研究会の時も「うんうんあゝすれば」「こうすれば」先生のすべてに注目したものでした。あののばら会のおかげで、在職中、年七十日位の子ども会を開き、子どもと一緒に歩むことが出来ました。いつもやりながら、先生の話術を頭の中に、えがいていました。個人的にお話を伺っても、何時も身近に色々教えて頂きました。「笑みをもって相手の心と通じ合う」先生にはそれが……。私の支えとなって歩み続けました。あのお話が、紙芝居が、人形劇が、今でも私の生活の一たんを、ほんとうにありがとうございました。私もからだを大切に頑張ります。先生、さようならやすらかに。(七頁)

村井ひさを

目を閉じると、堂々とした体躯と精一ぱい笑顔の吉村一信先生の姿が鮮明にうかぶ。

ある時、幼保教職者講習会で講演されていた先生にお会いしました。右手をうしろに廻され左の肩から人形の顔を出したりひっこめたりされながら、軽妙な動作に受講者も大喜びで、なごやかな講習会でした。終了後お話をされた言葉に、「学校の教頭職六年間も続けると、見も心もズタズタにされてしまうよ、でも時々こうやって人形を使いながらおはなし会をひらくと心が救われるんですね」と。

その後校長に昇進され学校教育の現場で児童文化の推進に励まれるのですが。

おはなしの上手な、大好きな、奈良王寺の里に生れた一信(いっしん)先生は口演童話者にかえった時が一番！！水を得た魚の心境！！だったのでしょ。

子どもの輝やく瞳は魅力がありますね。銀河の瞳をもつ子らの前で天命を全うされた、先生の一生は誠に崇高の限りです。まだまだ良き働らきをされる先生ではありましたが、数々の業を残されたものを今も後輩の人達が深く心にうけとめていくものと信じています。(十五頁)

さらに小林通夫と言う人がどのような関係なのかは解らないが、のばら児童文化会の結成が一九四六(昭和二十一)年だったとの証言がある文章も見つけた。

小林通夫

終戦後間もない、昭和廿一年阿部克孝先生のもと、夢と笑いを忘れた子ども達のために、児童文化「野ばら」の会が結成された。以来その中心となって四十年、その灯を高々と掲げ、終始一貫活躍してこられたのが一信先生であり、いま更のように、その頑張り子どもを愛し続けた崇高な姿に、心から敬意を表すものです。

独特の語り口、「なんにも仙人」「オッペルと象」「若返りの泉」等々、童話に！紙芝居に！人形劇に！いろんな傑作を生みだしてくれました。特に人形劇「若返りの泉」は秀逸だと思っています。一人五役をこなして両手遣いのあの妙技は、今も鮮明に浮かんできます。それとともにボランティア活動で行脚した時のことも思い出されてきます。

毎月、毎月、土曜日の午後、日曜日午前、午後と、柏原市の武田塾、長谷川学園、高(注9)学園、堺市の東光学園、太陽の家等々、そして動物園など懐かしく思い出されてきます。時には、阿倍野橋でバッタリ出会う、大衆酒場「淡路屋」で気さくに盃を重ねて論議したことも……。本当に惜しまれて、惜しまれてなりません。きっと天上で、阿部先生、栗谷館長、東川記者、広田女史らと

ともども第二の「野ばら」の会を作っていることでしょう。
ご冥福を心からお祈り申し上げます。(二十四～二十五頁)

これによると確かに一九四六年にのぼら児童文化会は活動を始めていたのだ。

7・おわりに

まだ不明なことは多いが、敗戦直後の一九四六年から、阿部克孝と吉村一信を中心にのぼら児童文化会の活動は開始された。この二人は戦前から子ども文化運動の中心団体だった大阪童話教育研究会の若手活動家であった。大坂童話教育研究会も学校の教員の構成員が多かったのであるが、のぼら児童文化会はさらに教育家の集まりと言うカラーが強くなっていった。そしてその活動の上に一九四九年までの占領体制下では成人教育視覚資料委員会として社会教育教材としての印刷紙芝居を発行した。吉村一信コレクションでは「御利益石—社会衛生」のみが現存している。さらに一九五四年から五六年の三年間、教画出版から、かなり小学校の教育カリキュラムにそくした内容の大量の印刷紙芝居を発行した。その企画製作は童話教育研究会の名がおおく使われていたが、のぼら児童文化会の活動がその母体になっていたと考えてよさそうだ。吉村コレクションに残された二十一点の教画出版紙芝居は、私のような戦前の口演童話運動の研究者から見れば、明治大正期からの関西児童文化運動の栄光の墓碑銘のように思えてならない。

(注)

(1) 堀田穰「紙芝居(箕面市立中央図書館蔵)吉村一信コレクションについて」『京都文化短期大学紀要第二十九号』七頁

(2) 二十六頁

(3) 二十四～二十五頁

(4) 前出論文「紙芝居吉村一信コレクションについて」二頁では「すべてをあわせると五十二点になる。」と書いた。

(5) 3・4は「稲むらの火」脚色松永建哉、絵画西正世志、日本教育画劇。11は馬場のぼるの絵本。18はアンデルセン原作の紙芝居。

(6) 13は「しろとくろ」作・童話教育研究会、画・貴谷青紅、一九五四。15・16は「がんのたび」作・吉村一信、画・岸谷勢蔵、一九五六。

(7) 追想誌『吉村一信先生』小田又治郎編、本田義一発行、一九八九。

(8) 「のぼら」誌では「淑」だがここでは「叔」となっている。それぞれにしたがった。

(9) 一字空いている。

続・紙芝居(箕面市立中央図書館蔵)吉村一信コレクションについて 1/25